子供の問いかけを尊重しよう

湯川秀樹先生は、“旅路”という本の中で幼年時代の思い出を、次のように語っていらっしゃいます。「仕事をしている母に向って、私はよくいろいろな質問をした。すると母は、いつも仕事の手を休め、私の方に向き直り、私の目を優しく見つめながら答えてくれた」と。

人間は他の動物と異なり、大脳が全く未完成の状態で生まれるため何も出来ないのに、幼児は強い好奇心のあるお蔭で知識をどんどん吸収し、どんな動物よりも優れた能力を育てる事が出来るのだと思います。

だから、子供の質問に対しては、湯川先生のお母さんのように、どんなに重要な仕事をさしおいても答えてやることが、絶対に必要なことだと思います。湯川先生があのように偉大な学者になられたのも、このようなお母さんに育てられたからだと私は思いますが、いかがでしょうか。

望みもしないのに詰め込まれた知識は消化されにくいので、真の知識にはなりません。子供が「知りたい」と願い、心からこれを求めた時に与えてやってこそ真の知識になるものです。

ところが、子供が求める時には答えてやらないで、子供が求めもしないのに知識を詰め込もうとするお母さんが少なくありません。列車や電車の中でよく見かけることですが、子供が熱心に問いかけているのに、うるさいとばかりにはねつけるもの、または下らぬ週刊誌に読みふけっている姿を見かけます。

車の中は騒音で会話には適しない所ですから、あえて「答えてやりなさい」とは申しませんが、子供の熱心な質問に対して少なくとも冷淡であってはならない、と私は思うのです。

“学問”という言葉が“質問”の“問”という漢字によって作られているように、質問は学問の重大な要件です。多くの物ごとに対して疑問を懐き、これを追究する気持が強いことにより深い学識を身につけることが出来るのだと思います。

「疑問を解決したい」という気持は、人間誰もが持っている本能的なものだと思います。だから、疑問が生ずると何とかこれを解決したいと熱望し、解決できない間は心が落着かないものです。

それだけに、自力でこれが解決できた時の喜びは、何ものにも代えられないものがあると思います。岡先生のおっしゃる「発見の鋭い喜び」も、その一つだと言えましょう。

常に疑問に答える姿勢を

しかしながら、まだ幼児には自力でこれを解決する力がありませんから、その疑問を母親が解いてやらなければなりません。母親にその疑問を解いてもらえれば、幼児は空腹時に御馳走をもらったように満足感が得られ、それが幼児の疑問を求める姿勢をさらに強めるのだと思います。

それに反して、子供の強い疑問に対して親がいつも冷淡でいますと、子供は「疑問を解決することの喜び――知ることの喜び」をいつも味わうことなく終りますから、自然と「疑問を持とうとしない子供」になっていきます。

昔から「問うは一時の恥、知らぬは一生の恥」と言われていて、質問することには恥ずかしさが伴うものとされています。事実、私たち大人は、疑問があって、それを知りたいと思いながら、恥ずかしさのためなかなか人に尋ねることをしません。だから、知らないままに一生を過ごすことになり、「一生の恥」をかき通す愚行を犯すわけです。

孔子は誰よりも祭祀について熟知していたのに、その執行に当たって一つ一つ係官に質問した、と論語に述べられていますし、また孔文子という人は、自分のわからないことは相手が誰であろうと恥ずかしがらずに質問した、とあります。

してみると、どうも知識の豊かな人ほど恥ずかしがらずに質問するもののようです。これは、恥ずかしがらずに質問したから、知識の豊かな人になれた、というのがほんとかも知れません。それはともあれ、「知識の貧弱な人ほど質問しない」ことは明瞭な事実です。

ところが、幼児は、質問することを少しも恥ずかしいことと思っていません。だからこそ幼児は目を輝かして質問をするのです。それ故に、幼児の質問を大いに歓迎し、喜んで答えてやるならば、ただ知識が豊かになるだけでなく、いつまでも質問することを恥ずかしく思わない人間になれるのではないかと思います。

湯川先生ほど偉大な方でも、幼い時にお母さんに疑問を解いてもらった時の情景をいつまでもなつかしんでいらっしゃるのです。この事は、お母さんにとっても同じだろうと思われます。

このような幼児期の親子の語らいほど、いついつまでも、思い出して心温まるものはないでしょう。

こういう思い出を胸にもつ親子は生涯きっと幸福だろうと思います。

（「母と子の新聞」連載“教育講座”昭和 56 年 4 月～58 年 3 月）